

学生主体のボランティアセンターの設置

静岡県立大学 国際関係学部 津富宏ゼミ（研究室）

指導教員：津富宏教授

参加学生：美和千里、日野聡子、小沼友姫、鴻野祐
吉田真友、倉田笑莉、田島美智子

1. 要約

東日本大震災をきっかけに、大学が組織的にボランティア活動を行うことができる役割を担うボランティアセンターの必要性が高まってきた。本学にも学生が主体となって活動し、周辺地域の方々と協働できるような地域交流型のボランティアセンターの設置を提案したいと考える。そこで、本学教職員および学生が、ボランティアセンターの先進事例、特にその役割や効果等を学び意見交換を行うことによって、本学におけるボランティアセンター設置に向けた動きを加速させるため、「静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム」を企画した。本報告書では、本フォーラムの内容とその成果、課題についてまとめ、地域への提言として今後の活動計画を提示する。

2. 研究の目的

東日本大震災において本学が主体になってボランティア活動ができなかったこと、ゼミの活動から地域や大学内での困り事を集めて共有する場がほしいと考えるようになったこと、そして本学にある既存のサークルで活動する学生を多角的にサポートする場が必要だと考えるようになったことの3つの理由から、本学にもボランティアセンター（以下、VC）が必要であると考えようになった。

そこで、本研究では、地域社会でボランティア活動を行いたい若者をサポートする拠点であるVCを構想するための提案を行うことを目的とする。本ゼミでは、すでに、明治学院大学、神奈川大学、桜美林大学におけるVCを視察し、提案のための基礎調査を行ってきた。

静岡県立大学は公立大学として、地域に根付き、地域の人々に関わる機会を学生に提供する責務を負っていると考える。そこで、本研究においては、学生自身が運営するVCを設置し、地域に住むすべての方と協働するボランティア活動を企画、参加できるような、地域交流型のVCを提案したい。

3. 研究の内容

- ①VCに関心のある学生を集めて、これまでの基礎調査を基にVCの具体的な設置案を考える。
- ②VCのキックオフとして、本学教職員および学生がVCの先進事例、特にその役割や効果等を学び意見交換を行い、本学におけるVC設置に向けた動きを加速させるためのイベントを開催する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

VCのキックオフとして、学内の学生団体と協力し、地域の方と学生が交流する場を設けて、地域が何を必要とし学生がどんなことを考えているのかを共有し、活動のきっかけをつくるためのイベントを行う。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

B. 一部修正

（理由） まずは、大学内におけるVCの知名度を上げ、VCを本学にも設立したいと

思ってくれる学生、教職員を増やすことが第一ステップであると考え、「静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム」を企画し、明治学院大学、神奈川大学、大阪府立大学のVCに関わる教職員、学生に来ていただき、勉強の場、または交流の場を作った。また地域の方にも呼び掛け、VCについて知ってもらうようにした。以下にまとめる。

【静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム】

日時：平成29年12月16日 13：00～20：00

場所：静岡県立大学国際関係学部棟1階 3108教室

内容：①第一部フォーラム

・他大学VC発表

(明治学院大学、神奈川大学、大阪府立大学)

・静岡県立大学サークル紹介

(リトルワールドキャンプ、SSS、YEC、NGOあおい、環境サークルCO-CO)

・VC構想案発表

②第二部交流会 その場で深めたい話題について語り合う。

③第三部親睦会 軽食を取りながら、他大学の学生・教職員と親睦を深める。

(3) 実績・成果と課題

参加人数：本学学生 13名 本学教職員12名 他大学の学生・教職員11名
社会人 5名 スタッフ 7名 計 48名

①第一部フォーラム

I. 明治学院大学（教職員3名、学生3名）

➤ 設立経緯

1995年阪神淡路大震災の際、学生の自発的なボランティア活動を大学としてバックアップしようという形で1998年横浜キャンパス、続いて白金キャンパスにVCを設立するに至った。

➤ 体制

センター長1名センター長補佐2名の教員、専任職員各キャンパス4名、ボランティアコーディネーターを2名配置するなど、教職員が手厚く配置されている。

➤ 目的

①ボランティア活動と教育との連携を強化、②学生の自主的な活動を応援すること、③地域社会との協働によるボランティアの推進、④ボランティアに関する情報提供⑤学生メンバーが活動すること。

➤ 活動内容

地域のお祭りに参加するなど地域活動行っている学生や主に外国の問題について考え、支援を行う海外プログラム事業を行う学生、ボルネオ島の自然保護をするなどの海外支援を行う学生など、様々なセクションがある。

II. 大阪府立大学（職員1名、学生2名）

➤ 設立経緯

2007年3月からサークル活動として「V-Mate」がスタートした。“ボランティアの輪を広げるためのボランティア”チームとして発足し、大学公認の機関としての「大学ボランティアセンター」設立を目指した。そして2009年に大学からの許可を得て2つ目のステージ「大阪府立大学ボランティアセンター」が発足し、大学のボランティア相談窓口として、学生と地域の声を受け止め、両者を結び、活動を後押しした。その後2016年に現在の「大阪府立大学ボランティア・市民活動センターV-station」が発足した。

➤ 体制

学生課学生サポートグループ内に設置されており、センター長1名、副センター長1名、ボランティアコーディネーター1名ほか、学生スタッフ約15名、ビクトリー仮面1名で活動している。

➤ 目的

学生と市民とが一緒になって地域の課題解決・理想実現を進められるように、協働の場づくりを行う。そして、市民活動に関する社会資源として大学の潜在能力の発揮し、他の支援機関にはない強みを生み出すことである。

➤ 活動内容

ボランティアコーディネーターとしてボランティア募集者と活動者の仲介を行うことと、地域交流促進等を目指したプログラムを企画すること。例えば、地元の小学校PTAから子どもたちと夏休みに何かできないかと依頼を受け、夏祭りをPTAの方と一緒に実現させた。

Ⅲ. 神奈川大学（教員1名、学生1名）

➤ 設立経緯

もともとは教職課程の学生のために、生涯学習の教員たちが中心になって学校ボランティアとして、インターンや研修を兼ねて学生を派遣することをやってきた。その後横浜市から事業委託を受け、内容を充実させる形になった。

➤ 体制

ボランティア活動支援室の学生スタッフとアルバイトスタッフが1名大学から配置されている。コーディネーターではなく様々な事務をしてくれている。

➤ 目的

学生がボランティア活動を通じて社会や地域に貢献することで、自らと社会の繋がりを理解し、より広い視野を獲得すること。

➤ 活動内容

熊本募金やカンボジアのサービスラーニング、古本回収など多岐に及んでいる。8月の六神祭では、学校の学食を貸し切り様々なサークルと地域住民100名ほど呼んで、食事や企画を通して地域の方と学生の交流を行った。また、学生は地域活動だけでなくコーディネーションを主に行っており、変動はあるものの月30～50名程度の学生の相談に乗っている。

Ⅳ. 静岡県立大学VC構想案発表

1. 学生への支援

- ・学生個人を学内外のボランティアの機会とつなぐ
- ・県大をベースに活動するサークルの中間支援
- ・学生と地域を繋ぐような県大生によるプロジェクトの実施

2. 大学として企画するボランティア活動

- ・県外で災害が起きた時、学生ボランティアを派遣する
- ・県大自体が被災した時、学生ボランティアをコーディネートする

3. ボランティア活動に関する教育の提供

- ・ボランティア活動に関する授業の提供
- ・学外でのボランティア活動が単位認定されるような授業の提供

②交流会

はじめに第一部の感想共有を行い、その後その場で今話したい話題をそれぞれ考えてもらった。出た問いとして、「県大生(学内)のサポートについて」「活動の原動力、その伝え方について」「ボランティアする学生を増やすためには？なぜボランティアをしないの

か？」「ボランティアセンターの主体とは？」「大学間の連携の在り方は？」などが挙げられ、それぞれ話したい人が集まり議論した。

③今後の課題

- ・地域に密着していくのか、総合的な支援をするのか、大学の資源を鑑みしてみる。
- ・メリットだけでなく、デメリットもしっかり考えていく。
- ・多方面に目配りしていると思うが、どこに重点を置くかも考えたほうがいい。
- ・既存のボランティアサークルの把握
- ・特にインシデント直後はボランティアがかえって行うことが無くなってしまいう等問題があるため、過去にボランティア先でどんなことが起こったのか学ばないといけない。

(4) 今後の改善点や対策

地域の方の呼びかけが不十分で、人数を集めることができなかったため、今後の改善策としてより地域の方に重点を置いた会を開き、VCを地域の方の意見を反映させながら作っていききたい。

5. 地域への提言

今後本学が中心となって地域活性化ができるよう、地域の方の困りごとを共有できるVCを設置するべく活動していく。以下、今後の活動の流れである。

①平成29年度

- ・学生主導のVCの構想を固める
- ・活動内容・方法を考える
- ・地域の方との交流の場を設け、VC構想の案をもらう。
- ・場所をもらうための交渉を行う

②平成30年度

- ・学生主導のVCを試行運営する。
- ・学内の組織（例 健康保健センター 障害学生支援室）と連携する。
- ・一般学生の支援、学内サークルの支援、地域との連携を主な活動内容とする。
- ・大学側での設置構想を固めるため、学生と教員からなる設置委員会をつくる。
メンバー：学長、このフォーラムに来ていただいた先生数名、上記委員会の学生
- ・VCの目的、場所、人員配置、活動内容などを固めて学内決裁を通す。
- ・スタッフの採用を行う

③平成31年度

発足する

6. 地域からの評価

今回参加していただいた地域の方の中で、実際にボランティアをしてくれる学生を募集している方が来ており、自分たちだけではうまく学生を集めるところができずに困っているとの話を聞いた。VCの話聞いて、困りごとを共有できる場ができることは非常にうれしいことだとの意見をいただいた。また、ボランティアをしている地域の方でない方も、VC設置に向けて頑張ってもらいたいと同意してくれた。今回は地域の方の参加が少なかったが、地域の方もVC設置に肯定的であることが分かった。